



フィジーで、障害がある子どもたちを支援する唯一の非政府組織(NGO)「Frank Hillton Organization」に理学療法士として所属し、首都スバで活動している。外来・訪問リハビリ、長期療養型施設の子どもたちと、その家族へのリハビリ

JICA だより



フィジー
古谷優衣さん(29)
呉市出身

リ支援が主な担当である。数カ月には一度は、離島や遠方の地域へ出かけ、数週間かけて対策などを助言する「アウトリーチ活動」に

子どものリハビリ支援

も従事している。活動の中心は子どもに対する理学療法、移動補助具の提供、家族指導などで、子どもたち一人一人に合ったサポートが何より肝要である。

最近、5日間の日程で「障害と開発」に関する研修に参加した。研修中の講義で何度も示された1枚のイラストが、強く印象に残っている。そこでは、ケアワーカーが村を訪れ「学校と補聴器を見つけました」と報告する一方、母親が「子どもは昨日亡くなりました」と告げる。そには「瘦せた子どもが横たわる姿が描かれていた。



このイラストは国際協力機構(JICA)海外協力隊として派遣される前にも見たことがあった。ただ、当時の私は「なぜケアワーカーは目の前の深刻な問題に気づかず、先の支援を進めてしまったのだろう」と思った。しかし、現地ですべてに活動すると、自分が同じような場面に直面していることに気づかされた。訪問時に合わせて車いすを用意したが、子どもが既に亡

子ども用の車いすを組み立てる筆者(左)と同僚。使う子どもに合わせて細部まで調整する

くなっており不要になったこと、親が死んでしまい、子どもが別の場所に移動したケースも経験した。

この研修を通して、私はイラストのケアワーカーと同じ立場にいるのだと実感した。職場の同僚に「このやり方には限界を感じる」と訴えたが、支援活動は資金提供者が求める「支援実績数」を重視せざるを得ないという現実も理解しなければいけなかった。

理想と現実の間で葛藤しながら、今日も模索を続けている。それでも私は願っている。いつかこの文章を、帰国後の自分が笑顔で懐かしく読み返せる日が来ることを。